

山都町茶振興計画

令和5年 3月 20日

山都町役場 農林振興課

～目次～

策定の趣旨・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1

第1 茶の振興の基本方向・・・・・・・・・・・・・・・・・・

第2 茶の現状と課題

1 アンケート調査結果・・・・・・・・・・・・・・・・・・

2 ワークショップ結果・・・・・・・・・・・・・・・・・・

第3 山都町の茶振興のための施策等

1 生産に関する取り組みと目標・・・・・・・・・・・・・・・・

2 販売に関する取り組みと目標・・・・・・・・・・・・・・・・

3 後継者育成等に関する取り組みと目標・・・・・・・・

第4 茶生産の指標・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

策定の趣旨

- (1) この計画は、お茶の産地である山都町のお茶振興について、現状を改善し、今後の経営がより良いものになることを目指すために計画を定めるものである。
- (2) 計画内容については、情勢変化に柔軟に対応した効率的な施策展開が図られるよう、随時、施策の成果等を点検、検証し、見直しを行うものとする。
- (3) 計画の推進については、山都町茶振興会をはじめ、山都町、熊本県、上益城農業協同組合等の関係機関と連携し、それぞれの役割に応じて、この計画の方向に沿った具体的な取組み等を推進・支援していく。

第1 茶の振興の基本方向

本町のお茶の歴史は古く、矢部茶の始まりは、元禄年間（1688-1704）に番所の役人が「青柳」と命名したことから始まったとされている。また、「矢部茶」の名称が出てきたのは、享保18年頃（1733）頃に、旧矢部町の商家が地場茶を集め現在の熊本市方面に取り扱ったことから始まっている。

その後、本町のお茶は昭和56年の全国茶品評会における釜炒り製玉緑茶の部、消費者ニーズに合わせて製造を始めた蒸し製玉緑茶の部での農林水産大臣賞を始め上位を独占し、矢部茶の名を全国に広めていき、県内でも有数の茶の産地となっている。

本町では、蒸し製玉緑茶・釜炒り茶の2種類の茶種が生産されるほか、紅茶などの多種多様なお茶が生産されており、有機質肥料と野草の敷き込みを徹底した根の活力向上を図った環境保全型茶業を推進している。

このように、茶は本町をはじめ本県においても深く根付いているものの、町内農業者の経営の大部分を占めるリーフ茶は、ドリンク茶や茶以外の飲料が消費者の生活に浸透する中で消費が減少しており、販売価格が低迷している。このため、全国的に茶業経営にとって厳しい状況が続いており、担い手や茶栽培面積の減少につながっている。

こうした中、本町の茶業の振興・産地としての維持を図っていくためには、多様化する茶需要をしっかりと捉えつつ、品質や付加価値の向上、生産の安定、担い手の確保など総合的に取り組んでいく必要がある。

このため、本計画では以下の3点を基本方向として、茶の振興のための施策を展開していくこととする。

〈基本方向〉

○生産

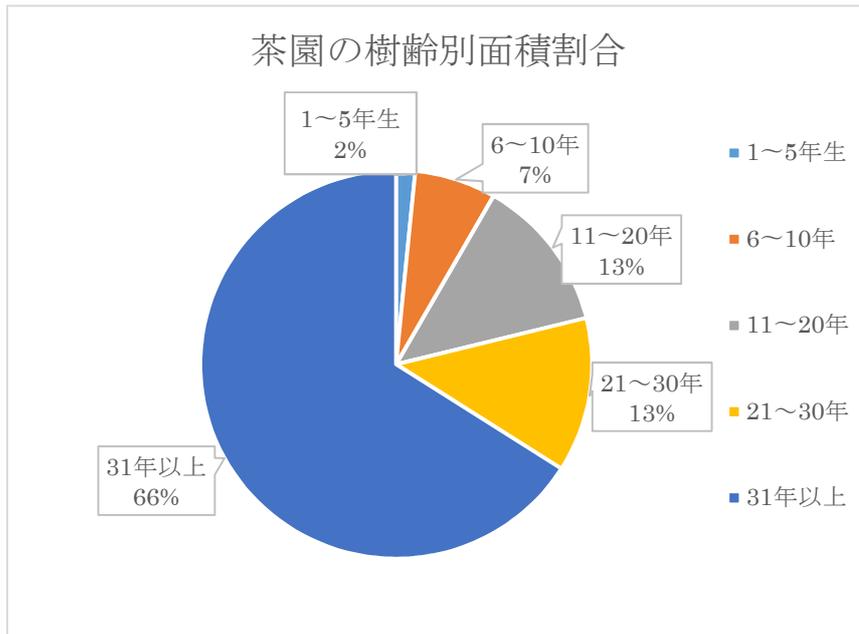
○販売

○後継者（育成）

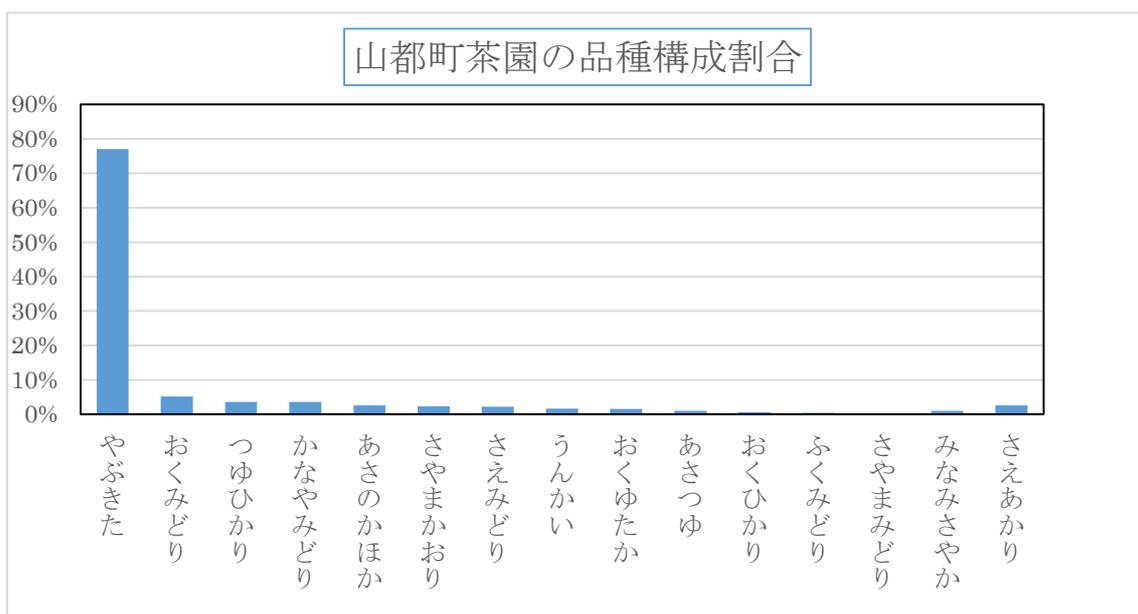
第2 茶の現状と課題

1. アンケート調査の結果から明らかになった現状

(1) 茶園について



茶の樹齢別面積割合については、樹齢31年以上が全体の半数以上を占め、茶樹の高齢化が目立っている。



町内の品種については、大多数がやぶきたを生産栽培している。
全体としては、15種類を栽培。

乗用摘採機

所有	個人	共有	共有人数 (平均)	平均使用年数	所有率
27	7	20	3.8	17.5	60%

乗用中刈機

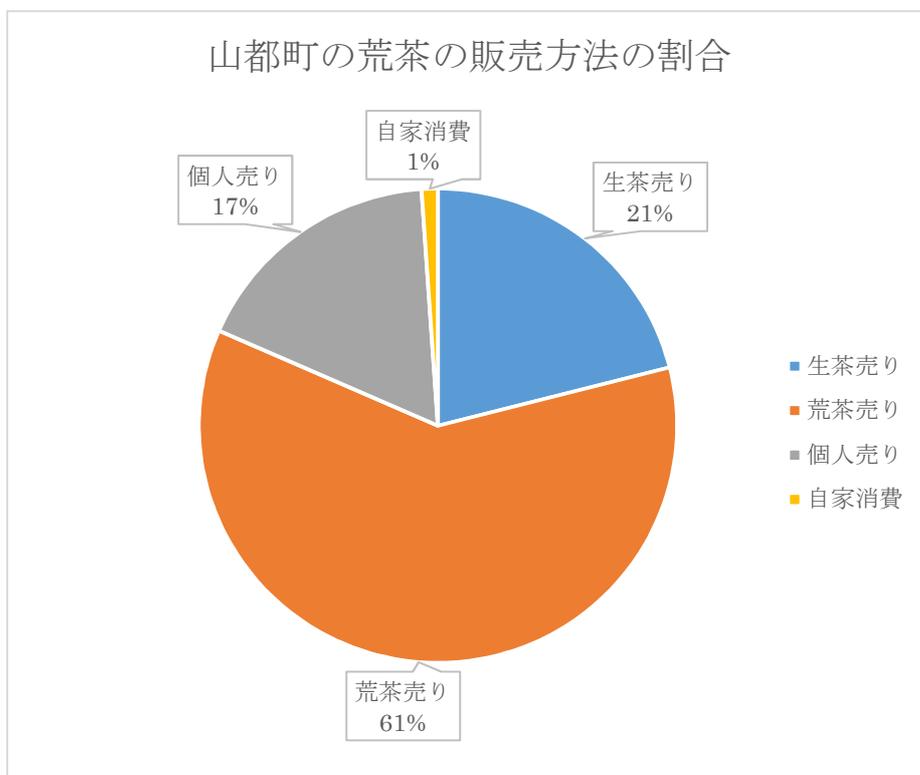
所有	個人	共有	共有人数 (平均)	平均使用年数	所有率
13	6	7	5.4	17.1	29%

乗用防除機

所有	個人	共有	共有人数 (平均)	平均使用年数	所有率
4	3	1	3	9	9%

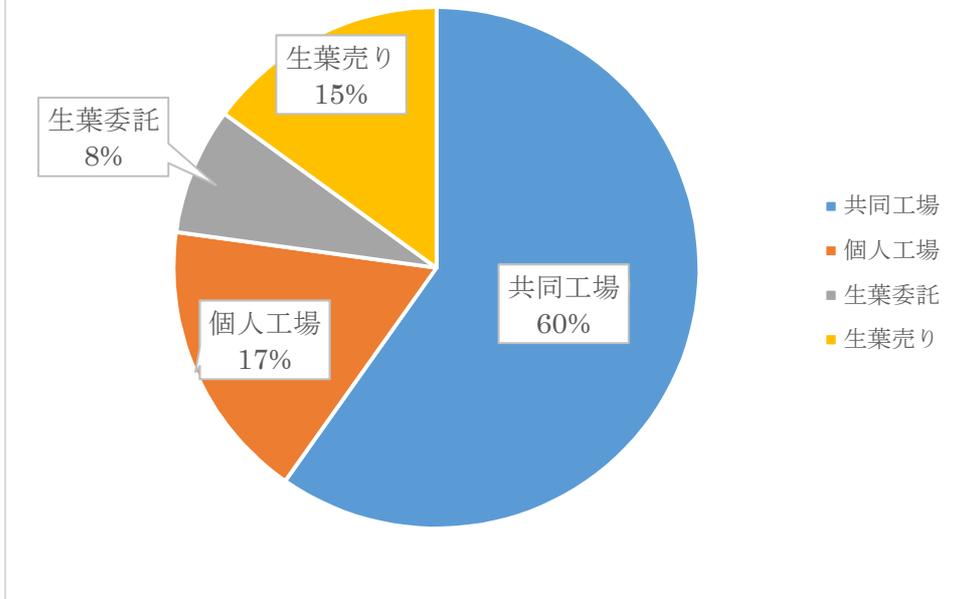
資本装備の状況については、乗用摘採機を半数以上の農家を使用し、中山間地域では比較的、乗用機械が入りやすい圃場が多い。また、導入から15年以上を経過していることが目立っている。

(2) 荒茶の販売・製造等について



製造後はほぼ9割が販売を行っている。販売方法は、荒茶売りが6割とほぼ半数以上を占めており、出荷先はJAが一番多かった。

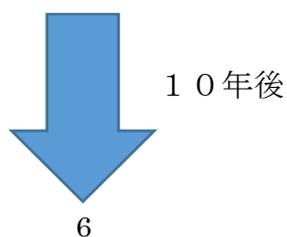
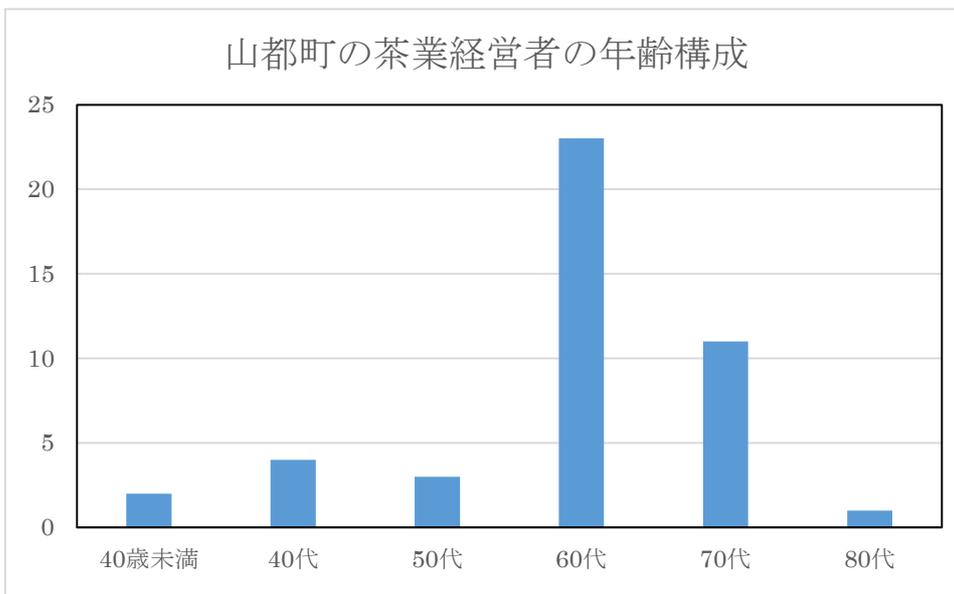
山都町の荒茶製造方法の種類別割合

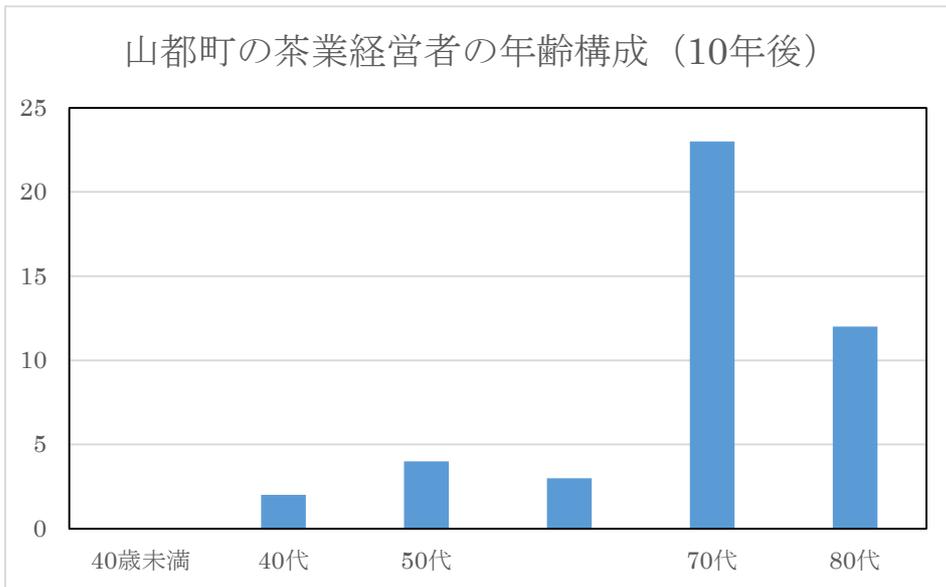


荒茶の製造形態としては、共同工場が半数以上を占めており、地域によって組合ごとに共同工場での製造を行っている。

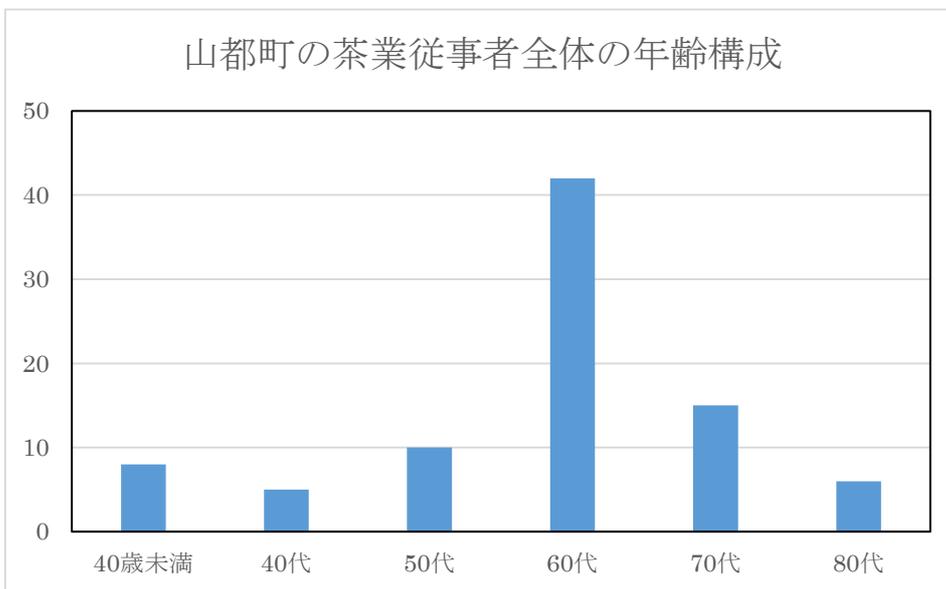
(3) 経営について

山都町の茶業経営者の年齢構成





現在の経営者の平均年齢は64歳となっており、60代と70代が大部分を占めている。うち後継者がいるとこたえたのは2経営体。
 10年後の想定では、経営者の平均年齢が74歳、一番多い世代が70代とさらに高齢化が進む見通し。



全体従事者の平均年齢は58歳となっており、ここでも60代が半数近くを占めている。

2. ワークショップであげられた現状

今年度、山都町において今後の茶振興に向けた計画を策定するため2回に分けてワークショップを開催した。そのなかで特に意見の多かった内容について記載していく。

1. 【生産】

- ・茶業は盛期を過ぎ、今は経営も担い手的にも衰退期である、現状を打破するための反転攻勢には大きな変化が必要。
- ・高齢であるが、生涯現役で頑張りたい。
- ・有機茶の普及
- ・さらなる良質茶の生産
- ・優良品種のへの更新
- ・永年作物のため簡単にはやめられない

2. 【特産品】

- ・釜炒り茶は矢部の特産品なので今後も押していくべき
- ・他市町（近隣であれば五ヶ瀬町）の取組についても学んでいく。
- ・今後のお茶栽培は有機を行っていくべき、茶業者全員で一致的に取り組むべき。
- ・特色ある茶を生産していくことが重要。（有機（無農薬）・釜炒り茶・紅茶）
- ・碾茶を作り、有機抹茶を製造する。抹茶なら町内の食品加工業者ともコラボできるのでは
- ・山都町の土地条件・気候条件を考えれば有機栽培の大規模化ができる
- ・有機栽培茶の窓口を1つにして共同販売を行う。

3. 【地理的・管理問題】

- ・山間地のため、傾斜地が多く、土地が狭いため小さな茶畑が多い
- ・地形的に注意しないと危ない茶畑が多い。
- ・傾斜地で土地が狭いため生産性が低く、生産量も少ない。
- ・茶は安い機械等の更新は高価なので難しい
- ・高齢化が進み、茶工場の維持管理や運営が難しい。

4. 【販売・流通】

- ・お茶の消費が減っているなかでもティーバッグの冷水茶は売れている。
- ・私たち組合からの経験からすれば有機栽培が有力だと思う。
- ・近年のお茶の値段が安いし売れにくい。
- ・消費者はペットボトルばかりでリーフ茶を飲んでくれない
- ・急須のある家庭、若い人が少ない
- ・お茶のPR 不足
- ・茶価の低迷により高齢化、後継者不足で販売や流通が潤っていない。
- ・販路拡大と単価アップが必要

5. 【高齢化・後継者】

- ・最大の問題は後継者、いかに後継者を確保できるか
- ・確保するカギは魅力ある茶業、働いて意義のある茶業
- ・茶農家の高齢化と周りに後継者が少ない
- ・後継者に継がせられる状態ではない。
- ・若い力を育てることが大切

これらのことから、現状等を分析し大きく分けて次の3つのことに分類し課題についての施策を分けていく。

・生産

- ・矢部茶の特徴でもある釜炒り茶、蒸し製玉緑茶において、近年は、全国品評会等での順位低迷、販売価格も低迷が続いており、安定した所得・品質を確保するためには品質向上と栽培技術向上が必要である。
- ・全国的にもお茶の消費量、茶業の衰退化が進んでいる。本町では、大きな変化を生み出し、新たな取組みを行っていく必要がある。
- ・本町以外にも、茶業で栄えている市町村は多くある。そのため、他産地の経営状況等を学び、交流を行っていく機会も必要である。

・販売

- ・リーフ茶の消費が低迷する中、販売価格の低下が続いており、単価も全国に比べて低く推移している。そのため、お茶の認知度や単価アップ・販路拡大に向けた取組みが必要である。
- ・茶の需要も多様化しており、日本のみならず海外でもお茶の需要は高まっているため、本町でも輸出に向けて取組みを行っていく必要がある。
- ・お茶は嗜好品であり、有利な販売を進めるためにはブランドづくりが必要である。このため、本町の産地・茶種の特徴を活かして山都茶のブランド力を強化していく必要がある。

・後継者（育成）

- ・お茶を親しむ習慣などが少なくなってきており、若い世代を中心にお茶の文化や魅力発信を図る必要がある。
- ・茶栽培農家の減少・高齢化が続いており、将来にわたって産地の維持を図るために、後継者の確保を図るとともに、若手農家の育成など栽培技術や製造技術の指導を行っていく必要がある。
- ・本町は、中山間地域に位置しているため傾斜地が多く、土地が狭い茶畑が多い。その為、今後は優良農地等を選定して圃場の集約を行うことや、茶工場の共同化など産地維持に向けて取組んでいく必要がある。

第3 山都町茶振興のための施策等

1 生産に関する取り組みと目標

1 「有機茶」

具体的な事業	短期（～1年）	中期（2～4年）	長期（5年～）
・モデル茶園を選定	選定・勉強会 （JAS取得の講習 や有機茶の取組み、 販売の講習）	JAS認証へ申請 （JAS認証取得は 継続的に行う。）	有機茶として生産・販 売を始め継続していく

具体的なモデル内容としては、有機栽培への意欲がある人を募ってモデル茶園を選定し、農薬や肥料等の展示圃場としての取り組みを初期段階として行う（有機茶に限らず）。その後、学習・支援を継続的に行いながら有機茶に取り組む。町・振興局、JA等とも連携をしていく。

2 「釜炒り茶」

具体的な事業	短期（～1年）	中期（2～4年）	長期（5年～）
・栽培技術と品質の向上	他産地との意見交換・交流等	統一した栽培・製造方法を検討	随時、講習会等を開催

全国でも特色を出せる釜炒り茶の品質向上・栽培技術向上は必須。栽培から生産まで統一した工程を目指す。他産地との意見交換や交流なども行い、共有できるものは取入れ、独自性も出していく。

3 「釜炒り茶・蒸し製玉緑茶」

具体的な事業	短期（～1年）	中期（2～4年）	長期（5年～）
・全国・県茶品評会出品圃場への補助・支援	圃場選定、補助・支援	全国・県品評会へ出品補助と支援も継続	継続

全国・県茶品評会の上位入賞に向けて、出品圃場を選定し、町や県などの関係機関で重点的指導や巡回、助言等を行い、町（茶振興会）から肥料代等の補助・支援を行うことで強化を図る。知名度を上げることが重要。高付加価値や需要増に繋げる。

全国品評会以外にも、紅茶や緑茶などの各種コンテスト等にも積極的に参加していく。

今後の生産ビジョンとしては、【有機+釜炒り茶とし、その達成のため、販売及び後継者育成等に向けて、次の取り組みを実施する。】

2 販売に関する取り組みと目標

1 「ブランディング化」

具体的な事業	短期（～1年）	中期（2～4年）	長期（5年～）
・パッケージデザイン等を統一	デザインやロゴを開発	生産者・販売者に統一を図る。	継続

山都茶のブランディング化を図る（できれば有機茶として）。消費者に釜炒り茶の伝統、希少性を感じてもらえるように山都茶の特徴を捉えたポスターや各農家の特徴がわかる早見表などを作成し、PRしていく。商品パッケージのデザインについても消費者が手に取りやすいように安全性・希少性を出したものにす。町で認定したロゴの使用などを検討する。新商品開発も検討する。

2 「PR・販売促進」

具体的な事業	短期（～1年）	中期（2～4年）	長期（5年～）
・販売促進事業	イベントへの協議、方法などを検討	販売促進を行い、各地に出向く。	継続

イベント等に出品し山都茶の知名度を上げる。直接生産者が販促先に出向いて販売することで消費者との繋がりをつくる。町は場所・相手先の確保や情報提供・支援等を行う。SNS等も活用して周知を図る。

PR等行うことについても、矢部茶の歴史などを把握・保存しておく。

3 「製造・輸出」

具体的な事業	短期（～1年）	中期（2～4年）	長期（5年～）
・ティーバッグ冷水茶等の製造を増やす	検討	試験的に販売	うまくいけば継続していく。

現状、売れ行きも比較的効果のあるティーバッグ冷水茶やスティック茶を消費者の手に取りやすい価格で販売し製造量を増やしていく。考え方としては、高いものには価値を付け、安くできるものは量を増やし消費者が手に取りやすくする。

輸出については、輸出に係る経費等も多く、先行きが不透明なので長期的に考え少しずつ試験的に行う。ターゲットとしてはアジア圏を検討する。

3 後継者育成等に関する取り組みと目標

1 「町内外からの呼び込み」

具体的な事業	短期（～1年）	中期（2～4年）	長期（5年～）
町内外から兼業農家の人材を集める法人の設立	集約できるような生産組織の法人化		技術の伝承

新たに取り組む、有機茶・釜炒り茶のブランディング化を行うことで、需要や知名度が高まり、よって産地である山都町に人が集まりやすくなる。魅力ある茶業・働いて意義のある茶業をアピールしていく必要性がある。

2 「若手・後継者へのサポート」

具体的な事業	短期（～1年）	中期（2～4年）	長期（5年～）
若手農家への圃場の巡回、製造指導	研修や巡回を行う。	継続	継続

現状、後継者が増えるのは厳しい状況であるため、既存で茶業を行っている町内の若手農業者へ町・県・JA等が協力し重点的な指導を行い、今後を担う者として育成を図っていく。

3 「圃場等の管理」

具体的な事業	短期（～1年）	中期（2～4年）	長期（5年～）
各農家の圃場の集約・工場の共同化	検討	個人工場、共同工場毎に圃場の整理、工場計画を行う。	圃場の集約、共同化を行う。

産地として維持していくためには、優良で管理しやすい圃場の集約や工場の共同化を図り、効率性を重視した経営を行っていく。

第4 茶生産の指標

指標名	基準年 (R4)	目標年 (R9)
茶園面積 (ha)	180	160
茶栽培農家数 (戸)	170	150
有機茶に取り組む農家数 (戸)	4	8
茶工場の再編・共同化に取り組む地区数 (箇所)	0	2

数値：R3年九州農政局「山都町生産流通状況等調査」より